師匠と一夜

ワンナイト・ホラー　9

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18892014

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, モブ霊, 芹霊, エク霊, ♡喘ぎ, 男性妊娠, 律霊

ワンナイトしまくってる師匠が相談所のメンツにバレて泥沼化する話の９話目です。律霊、芹霊のみ本番があります。また、子供が少ししゃべります。なお攻めの倫理観がアレとなっております。お好きな方はよろしくお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ワンナイト・ホラー　9

２人めの男の子が産まれて。
正直、モブたち３人が子育てに慣れていたし、産後１ヶ月はゆっくり休んだので、1人目の時より楽だった。
だが。
エクボとの間に産まれた赤ちゃんは、泣かない子だった。
じいっと俺やエクボ、その辺りにいるらしい霊を見ている。
「生まれつき霊力が高いからな。ちょっと変わったところもあるだろうよ」
エクボは気にしていないが、俺は少し育児に不安を感じていた。
半分悪霊のこの子は、普通の育児でいいのだろうか……？
それに、母乳は飲んでくれるが、粉ミルクは拒否するので、最初は搾乳に苦労した。
頻回の搾乳に乳首が切れて血が混じる。
血が混じった母乳はよく飲んでくれて、それがまた、不気味だった。
「霊力を飲んでるのかもしれねぇな」
試しにエクボが粉ミルクに霊力を込めると、これまでが嘘のように粉ミルクを飲んでくれた。
それからはモブたちも力を込めて粉ミルクを作れば飲んでくれるようになったので、大分楽になった。
あとは、兄弟仲良くしてくれれば文句はないのだが、お兄ちゃんは弟を一目見た瞬間から怖がって、近寄りもしない。
「茂隆（しげたか）は霊が見えるからな。永崇（えたか）が……ちょーっと怖い姿に見えてるかもな」
エクボは言葉を濁すが、モブや芹沢はあからさまに目を逸らす。
なあ。
モブや芹沢には、この子はどんなふうに見えてるんだ……？
それでも。
エクボとの赤ちゃんは、可愛い俺の息子だ。
エクボに付き添われながら、兄弟を公園に連れて行く。

タバコを吸うために離れたエクボを横目に。
すぐ砂遊びをし始めたお兄ちゃんに対して、弟はぼーっと座っている。
「……永崇、公園退屈か？」
反応が無い。
俺は赤子を抱き上げて、じっとその顔を見る。
エクボとの間に産まれた子は、びっくりするほど俺に似ていて、明るい髪色が目立つ。
「……昔々、あるところに、おじいさんとおばあさんが……」
なんとなく昔話を始めたら、ピクリと反応したので、思い付く限りの童話を話す。
が、流石にネタが尽きて。
「昔々、あるところにおじいさんとおばあさんが……」
思わず最初の話をしたら。
「それ、聞いた」
ゾク、とする。少し甲高い俺によく似た声で、はっきりと赤子が話した。しまった、という顔を生後半年の赤子がする。
「話せたのか？」
「……おかあさんが怖がるから、話してなかった」
「お父さんは知ってたのか？」
うなずく。
「……て、天才じゃないか！すごいぞ永崇」
恐怖を押し込んで我が子を誉める。
「怖く無いの？」
「怖いものか。すごいことだぞ。お前はすごい学者になるかもしれないな」
赤子の頬に口付ける。
「お父さんは、おまえはこの世を終わらせるレベルのやくさいになるかもしれないな、って言ってたよ」
……あの野郎。ちょっと話し合いが必要だな。
「そんなことあるもんか。おまえはとびきりいい子だよ。お母さんはお前が大好きだ」
「お母さんは俺が嫌いじゃないの？」

「そんなことあるものか！誰がそんなことを言ったんだ？」
「だって、無理矢理うまされた」
赤子の目が、大人びた複雑さをもって、憐れむように俺を見る。
あ。
何かの扉が、開きそうになった。
「……俺はお前が産まれてきてくれて嬉しいよ」
その扉を無理矢理閉じて、赤子を抱きしめる。
「いいか、永崇。お前に罪はない。お母さんはお前を愛している。忘れてくれるな」
じ、と少し感情ののった目で赤子が俺を見る。
「お母さんはおひとよし」
「どこで覚えてきたんだそんな言葉」
「だから、おれたちで守ってあげなきゃ」
感情の読めない声で言われて、苦笑する。
「赤ちゃんに守られるほど弱くはねーよ。大丈夫だ。お前らは命に代えてもお母さんが守ってやるよ」
「あっ」
小学生が遊んでいたボールがこちらに飛んでくる。
キャッチしようと手を伸ばしたら、兄弟が同じように手をかざす。
ぴた、と止まったボールは、一瞬でどろりと異臭を放ちながら溶けた。
「……ありがとな。でもボールを溶かしちゃだめだ」
俺はボールの弁償代を小学生に渡しながら赤子に言う。
「アレが助けると思わなかった」
「んんん〜！？お兄ちゃんをアレ呼ばわりはダメだぞ！？」
「アレは化け物だ。お母さん気をつけて」
俺は戸惑ってしまう。とにかく。
「兄弟喧嘩はやめなさい」
俺がそう言うと、赤子だけでなく心なしか、お兄ちゃんまで呆れた顔をした。

※

律くんにバレた。
結果を先に言うとそうである。
実家に連絡無く相談所に入り浸るモブを訝しんだ律くんがある日、アポ無しで突撃してきた。
もう弁護士になっていた律くんは、モブが不法に俺に長時間働かされている、と勘違いして、訴えてやると乗り込んできたのである。

ちょうど、授乳してる時に。

「え……霊幻さん？何してるんですか？」
うん。説明がめんどくさい。
「俺の子」
端的に説明する。
「なんで霊幻さんが授乳して……え、ていうか、その子は」
知らない人が来て俺の後ろに隠れてしまったお兄ちゃんが、モブによく似た黒髪を揺らしながら、半月型の目を律くんに向ける。
「おかあたん、あれ、だれ」
「律おじさんだよ。怖い人じゃない」
あ。
何もかも説明してしまった。
硬直する律くんに来客用ソファーをすすめる。
「師匠？休憩中の札を出してたのに、誰か入って来たんですか？」
ガチャ、とモブが掃除用具を持ったまま顔を出す。
「律……！」
「兄さん……これはどういうことか、説明してくれるよね」
「……師匠に口止めされてたんだけど、これは仕方ないですよね、師匠」
これまでのことをかいつまんでモブが律くんに話す。
幸せそうでにこやかなモブに反して、律くんはだんだん青くなっていき、とうとう頭を抱えてしまった。
「兄さん……兄さん、それは犯罪だよ……」
「分かってるよ、だから服役しようと思ったんだけど、上手くいかなくて」

「何も分かってないよ！今も兄さんは、霊幻さんを……！」
ぴと、と俺は人差し指を律くんの唇につける。
「もう同意の上だから」
「……」
律くんが黙り込む。
「俺も、なんとかモブたちを社会復帰させようとしてるんだが、中々難しくてな……ま、今はこんな状況だ」
「……茂隆を抱いても？」
頷く。律くんはお兄ちゃんを高い高いした。
「……はは、兄さんそっくりじゃないか。もう超能力も？」
「そうなんだよ。たまに暴走して大変で」
「……僕なら抑え込めます。これからは甥っ子の面倒を僕も見ます。これは身内の義務でしょう。兄さんの説得もできるし」
嬉しい申し出だが、仕事は大丈夫なんだろうか。
「仕事の合間、と言う形になるので、そんなに頻繁には行けませんが。……ホントは両親も手伝いたかったと思いますよ」
「モブの戸籍に汚れをつけたくなかったからな……料理を作り置きとか頼める？」
「遠慮ないですねアナタ」
使えるものはなんでも使う。子供が産まれてからは特にそう思うようになった俺は、ニッと律くんに笑った。
「律、助かるよ。僕最近働き通しで、茂隆が遊び回るようになったら大変で……」
ふあ、とあくびをするモブ。
それから律くんは、たびたび相談所やマンションにお兄ちゃんの面倒を見に来てくれるようになった。

ある日、マンションでお兄ちゃんを律くんが抱っこしてくれている時。
「……意外とお母さんしてるんですね」
「子供は好きだからなぁ」
ちぱちぱと赤子が母乳を飲んでいるのをぼんやりと律くんが眺めている。

「……のむ？」
思わず訊いてしまって。
「……良いんですか」
そう返ってきて驚いた。
「……いいよ。お腹壊すから、少しだけな」
お兄ちゃんを床に下ろしてこちらに来る律くんは上気した顔をしていて。
あやまちを犯してしまった予感に身体が震える。
俺の前にひざまづいた律くんはちゅう、と乳首を吸い上げて。
「あ……っ」
乳首をベロリと舐める。
「甘い……ねえ、霊幻さん」
魔性の顔をして、律くんが俺を見上げる。
「溜まってるんじゃありませんか？」
「んぅ……っ」
ぐりっと股間を握られて、身体が震える。
「ストレス溜まるでしょう？兄さん達に監禁されて、自由な時間なんてなくて、ヌく暇すらないでしょう？」
おあつらえむきに、今は見張りのモブは爆睡中だし、子供たちもうつらうつらし始めていた。
「ストレス発散に、付き合ってあげましょうか？」
「えっ……それは、どういう」
戸惑う俺にくすりと笑う。
「あなたも良くやっていたでしょう？僕もね、悪い癖があって」
律くんが耳に口を寄せてくる。
「ワンナイト。やめられませんよね、アレ」
ごくりと喉が鳴る。
「律くんも……？」
「ええ。一夜限り、後腐れなく、身体だけの関係を。あんなにスッキリするものはない」
わかる。俺の身体も、今それを求めている。
「しちゃいましょうよ、ワンナイト。バレなきゃ大丈夫ですよ」
ふらふらと、律くんの手を取る。

次の瞬間には、口付けていた。
くちゅくちゃと響く水音に、慌ただしくスウェットを脱がされる衣擦れの音。
「声が漏れると困るから、ずっとキスしててくれよ」
俺が囁くと、
「唇腫れそうですね」
イタズラっぽい声が返ってきた。
俺も律くんのスーツを脱がせていく。
「ハンガー……」
「そんなの、いいですから」
ソファーに押し倒されて、律くんのがさついた手が頬から喉に滑って、身体のラインを辿る。
「これ……」
「ああ、帝王切開の跡だよ」
下腹部の２０センチほどの傷口に律くんが触れる。
「本当にあなたが産んだんですね……」
「そーだよ。子供できちゃうから、ゴムはちゃんとしてくれよな」
「もちろんですよ」
「ん」
ぷちゅ、とまたキスをして胸をいじってくる。
「ん……っふ、んんっ、んっ」
母乳が漏れるのを律くんが目を細めて愉快そうに見ていた。
「メスになっちゃったんですね、霊幻さん」
「これから律くんがオンナにしてくれるんだろ？」
煽れば、律くんはソファーに俺の手首を押さえ込んで身体を擦り付けてくる。
「あっ♡ああっ♡んんっ……」
カウパーまみれの性器同士がグチュグチュ音を立ててもつれあうのに、上がった嬌声を、律くんが口で飲み込んでくれる。
こっそり。バレないように。
ゴソゴソともどかしい動きで高め合うスリルに興奮してくる。
「んんっ、ふぐっ、んぅ……」
律くんの指がそろりそろりと後口に差し込まれていく。

大きな音を立てないように、くちゅ……ぬちゅ……とゆったりと体内を探る指に鳥肌が立つ。
「ん！」
ぐに、と前立腺を押されて息を詰める。
俺の様子に気が付いた律くんがぐ〜っ、と指をずらすように前立腺をゆっくりとこすった。
「〜〜〜〜〜〜〜っ♡」
ゾクゾクゾク、と甘イキが脚全体に走って、ひく、と喉がひきつれた。
「も、挿れて大丈夫ですか」
お互い焦らしっぱなしみたいな状態だ。ガチガチになってる律くんにこくこくと頷く。律くんは脱ぎ捨てたスーツのポケットからコンドームを取り出して、慌ただしく装着した。
「挿れますね」
ゆ……っくりと、挿入される。
「あ、あ、あ、んっ、んんっ」
ぞわぞわぞわ、と全身に怖気が立つ。
腰を打ち付ける音でバレないよう、じれったいほどゆっくりと抜いて、また挿入される。
「んぅ〜〜〜〜〜〜〜♡」
びりびりびり、と腰に甘イキの重さがどんどん溜まっていく。
ヤバい。
思ってたより、コレ、イイ……っ♡
「んっ♡んっ♡んぐっ♡」
律くんのがゆっくり抜けていく時に、カリがぐにんとふくらんだ前立腺をこねていって、足が跳ねた。
「ナカ、すごくキュウキュウしてますよ」
熱っぽい声が律くんから落ちてくる。
「らって、すごく、イイ……♡」
答えて口付ける。
角度を変えて貪りながら、またずろろろ、とゆっくり挿入される。
「んううう……♡」
頭の毛穴まで開くようなザワザワした感覚に涙が一筋垂れる。

「んっ！♡」
奥まで入った、と思った瞬間に、またぐっと腰を押し込まれて背が反った。
「……っ、イキます」
じわ、と奥であついものが出される感覚。
「俺も、イっ、く……♡」
ずるるる、と逸物を抜く感覚に、ぞぞぞぞ、と鳥肌が立って、びゅくと精液が出た。
「身体が、あつい……♡」
快感を伴った熱が身体の中をぐるぐると回っている。
こそこそセックス、ヨかった……♡
「俺も興奮しました。良かったですよ」
ちゅ、と俺の髪に口付けながらコンドームをティッシュに包んでポケットにしまう律くん。
「早く片付けてしまいましょう」
俺たちは慌ただしく体液を掃除して、急いで服を着た。

不思議とそういう雰囲気ってのは出てしまうものなのか。

「あの、霊幻さん……そろそろいいですか」
久しぶりに芹沢から声をかけられたと思ったら、子作りのお誘いだった。
「やっと俺の番です」
俺を抱きしめる芹沢を抱きしめ返す。
「準備してくるから、待っててくれ」
洗浄ついでに、よく拡張しておく。あいつのデカいからな。
「お待たせ……って、おいっ」
ぐいっと俺を引っ張ってベッドに連れて行こうとする芹沢の目は血走っている。
「霊幻さんっ、四つん這いでお願いしますっ」
「分かったって」
前戯も無しに挿入かよ……ま、いいけどさ。
と、思ってたら。

「あっ！？」
芹沢の大きい手で性器が包み込まれて、激しく前後にこすられる。
「ちょっ……なんだよ、今日は……っ、イく、イくって……っ♡」
もうちょっとでイける、という時に。
「あああ……っ♡」
ずぷん、と芹沢に侵入されて、デカマラに上がって来てた精液が止められた。
「んぅっ♡んぁっ、あ、あぐぅ……っ♡キツ……♡せりざわぁっ、いじめるなよぉ……っ♡」
そのままガスガスと突かれて、芹沢の手オナホで扱かれて、目の前がスパークする。
「すみませんっ、今日の霊幻さん、色っぽくて……っ」
……昼間に良いセックスしたからな〜。
「あんっ♡あぎ、あああっ♡イ……っ♡♡♡」
びくびくびくっ、とメスイキする。
きゅううっと締め付けた芹沢も中に精を叩きつけてくる。
「霊幻さん……」
抜かないままひっくり返されて、そのまま抽挿を再開される。
抜か２かよ、マジか。
ぐちゃぐちゃとさっき出した精液をかき混ぜながら、芹沢が奥へ奥へと腰を進めてくる。
「あっ♡あ、あうっ、んんっ♡」
肉壺全体がデカマラに擦られてじんじんと熱を持ってきた。こちらから締め付けると気持ちいいし、悩ましく眉をひそめる芹沢が楽しい。
「……っ、確実に、妊娠させますね」
「へっ？」
ぐい、と芹沢が俺の足を持ち上げて、芹沢のふとももの下に持ってくる。
──種付けプレスの体勢だ。
「ちょっと待っ」
ずどん。
「〜〜〜〜〜〜〜〜っ♡」

エビゾリした俺の口に舌がしまえない。
ぬろろろ、と精液まみれのデカマラが抜かれていくのを絶望感と期待とをない混ぜにして呆然と見る。
「やだ、ダメだって、それダメ……っ」
「良さそうじゃないですか」
また、ずどん、と打ち込まれて。
「あぁあああぁあああっ♡♡♡」
シーツをたぐり寄せながら髪を振り乱す。
「ダメなとこっ♡入ってるからあっ♡そこは処女だからぁっ♡♡♡」
ごく、と芹沢の喉が鳴る。
「──出しますね」
ずどん、と種付けプレスされて。そのまま結腸の中に出される。
「あ……あぁ……」
結腸イキしたシビれの中、たぷん、と腹の中に精液が溜まる感覚。
子宮に直接注がれたみたいだ。
「中出しキモチイイ……♡」
うっとりと腹を撫でると、また、びゅく、と芹沢が射精する。
「芹沢の赤ちゃん、楽しみだな……？」
そう言うと、芹沢は俺の足を下ろして、ぎゅうっと抱きしめてきた。

その後、俺は無事妊娠して、妊婦生活を送る……かたわら、たまに律くんをつまみ食いして楽しんでいた。

割り切った関係。そう思って楽しんでいた。

ある日、律くんのポケットのコンドームが落ちたのを何気なく見るまでは。

「……穴？」

電灯にかざさないと分からないほどの、小さい穴がコンドームの中心に開いていて。

おそるおそる振り返ると、律くんが壮絶なほどに綺麗に笑ってい
て。
弁護士バッジを、指で弾いていた。

Ｑ：男性が持参した避妊具は信用してもいいでしょうか？

続